

「はべり」から見た後撰集諸本間の距離

著者	福田 孝
雑誌名	武蔵野大学日本文学研究所紀要
号	4
ページ	3-14
発行年	2017-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000537/

「はべり」から見た後撰集諸本間の距離

福田 孝

はじめに

後撰和歌集は本文が乱れていることで有名である。現存する諸本のほとんどは定家本系であり、非定家本は切を含めても僅かしかない。にも関わらずその少数の写本を比較するとき、その乱れ方は本文の異同をはじめとして歌序・歌の出入りにまで及び、その整理はきわめて困難である。その整理を試みて一定の見通しを立てたのは杉谷寿郎であり、氏は以下のように大きく諸本を再整理している。¹⁾

一、汎清輔本系統

(一) 二荒山本

(二) (1) 片仮名本 (2) 伝慈円本 (3) 承安三年本

二、古本系統

(一) (1) 白川切 (2) 角倉切・木曾切 (3) 堀河本

(二) 胡粉地切

(三) 行成本

三、承保三年本系統 関西大学本・天理図書館本
四、定家本系統

(一) 無年号本 A類本・B類本

(二) 年号本 (承久本・貞応本・天福本など)

本論ではこのうちの二荒山本・片仮名本・承保三年本・雲州本・堀河本・伝坊門局本・天福本を用いて諸本間の距離を測定することを試みてみたい。測定に用いるのは詞書中に頻出する丁寧語(聞き手尊敬語)「はべり」である。「はべり」は勅撰集において撰者が撰集の勅を承り、撰じた集を天皇に奏上するときを想定してなされた、撰者から天皇に向けて歌の成立事情を述べ出す態度を示す変数として機能しているといわれる。後撰和歌集の詞書には非常に多く用いられている。²⁾ 対して、後撰和歌集の本文の乱れ方は尋常でないため未定稿であるといわれるところがあり、かつて片桐洋一は詠者名が作者名として独立して書かれず詞書内に含まれる書き方がなされている写本がある

のを、原資料をそのままに取り入れた結果であるように論じている。「はべり」が多用されていることと、原資料ママであることとは相容れない事態である。こうしたところから後撰和歌集の本文状況を把握するためには「はべり」の考察が欠かせないと思われる。今回はその端緒として「はべり」の使用状況に關して量の点から諸本間の距離を計測してみる。

一 数値化の実際

表は以下のように作成した。後撰和歌集卷一・二十一番歌の三本の詞書を示す。

人にわすられ侍りけるころ

あめのやます侍りければ(堀)

人にわすられて侍りけるころ

雨のやますふり侍りければ(保)

ひとにわすられて侍りけるころ、

雨のやますふりければ(天)

堀河本と承保三年本とは一行目と二行目の二箇所には「はべり」が用いられており、天福本では「わすられて侍りける」の一箇所だけである。表1では、三本に共通の一行目の「はべり」を

「堀保天」の列に1として数え入れ、堀河本と承保三年本の二行目にある「はべり」を「堀保」の列に1として数え入れてある。歌が前後したり同一歌の詞書内で語句が前後して入れ替わったりしていても同一箇所と考えられるところに「はべり」が用いられているときにはそれを1と計上して表の中に入れてある。天福本の歌序に従ったうえで各巻毎の計上である。このようにして堀河本と承保三年本と天福本の三本について作成したものが表1である。

はじめの列「堀保天」に三本に共通して同一箇所用いられている数値を入れてある。別に堀河本と承保三年本の二本に共通して同一箇所用いられている数値と、天福本の一本のみに用いられているものの数値とを並べ、列「堀保」と列「天」としておいてある。この「堀保」の列の数値が「堀保」の二本の近さを示し、「天」の列の数値が「天」が二本に対して一本として孤立していることを示していることになる(当該詞書の二行目の「はべり」については、「堀保」の列に1が計上されて入り、「天」の列には何も計上されない)。この二列の数値を加算して見ることによって「堀保」と「天」との距離を測ることになる。二列の数値を加算した小計の数値が大きいほど、「堀」「保」が近く「天」が他二本と離れていることになる。

このようにして作成した表1において、同じ巻の中で小計が最大の数値になっているところを太字にしてみた。これによって、巻一から巻十四までは承保三年本と天福本が近く、巻十五と巻十六では堀河本と承保三年本が近く、巻十七から巻二十ま

表 1

	堀 保 天	保 天	堀	小 計	堀 天	保	小 計	堀 保	天	小 計
卷一	14	1	5	6	1	1	2	3	2	5
卷二	7			0	2	1	3		1	1
卷三	11	4	4	8	1	2	3	2	4	6
卷四	14	6	6	12	4	1	5	2	3	5
卷五	4	2	1	3	2		2		2	2
卷六	7	2	1	3	1	2	3			0
卷七	10	2	3	5	4		4		1	1
卷八	2	1		1	1		1			0
卷九	14	1	5	6			0		3	3
卷十	11	13	9	22	3	3	6	1	2	3
卷十一	16	18	11	29		2	2	4	4	8
卷十二	25	9	7	16	2	1	3			0
卷十三	15	12	9	21	1		1		4	4
卷十四	18	11	9	20	1	5	6	2	3	5
卷十五	21	1	1	2		1	1	4	10	14
卷十六	33	1		1		1	1	10	18	28
卷十七	31	3	1	4	8	9	17	4	6	10
卷十八	20			0	2	7	9		1	1
卷十九	13		1	0	8	8	16	2		2
卷二十	22		1	1	11	8	19		1	1
計	308	87	74	160	52	52	104	34	65	99

では堀河本と天福本とが近いという結果を見て取ることができ
る(ただし巻一から巻八までは四季の部立であるため詞書が短
かったりして「はべり」の用例数が多くないため明瞭な傾向が
出ていない)。これは、以前から知られている堀河本と承保三
年本とのそれぞれが混態本であることに合致する様相を示す結

果となつてゐる。すなわち、堀河本は巻
一から巻十四までが堀河本本来の本文を
持つており、巻十五から巻十七の途中ま
で(おそらくは一二一五番歌まで)が承
保三年本系の本文を持つており、巻十七

表 2

	堀 保 天	保 天	堀	小 計	堀 天	保	小 計	堀 保	天	小 計
卷十四 ~1053	15	7	9	16		1	1		1	1
卷十四 1054~	3	4		4	1	4	5	2	2	4
卷十七 ~1215	7	2		2		1	1	4	4	8
卷十七 1216~	24	1	1	2	8	8	16		2	2

図 1

堀河本

卷一・卷二・卷三……………卷十・卷十一・卷十二・卷十三・卷十四・ 卷十五・卷十六・卷十七・卷十八・卷十九・卷二十
┌──────────────────────────────────┐ ┌──────────────────┐ ┌──────────────────┐
└──────────────────┐ └──────────────────┐ └──────────────────┐
独自本文 承保三年本系 定家本系

承保三年本

卷一・卷二・卷三……………卷十・卷十一・卷十二・卷十三・卷十四・ 卷十五・卷十六・卷十七・卷十八・卷十九・卷二十
┌──────────────────────────────────┐ ┌──────────────────┐ ┌──────────────────┐
└──────────────────┐ └──────────────────┐ └──────────────────┐
定家無年号B類系に近い本文 承保三年本系といつてよい本文系

の途中（おそらくは一二一六番歌まで）から巻二十最終歌までが定家本系の本文を持つという混態本であると見られる。承保三年本は巻一から巻十四の途中まで（おそらくは一〇五三番歌まで）が定家本系（無年号B類本）に近い本文を持っており、巻十四の途中（一〇五四番歌）から巻二十最終歌までが承保三年本本来の本文を持つという混態本であると見られる。二本の混態の様子を図1に示した。表1の小計の太字の数値はこうした混態の実態によく合致しており、これによって、諸本間の距離を測ることに「はべり」を用いることが有効であることが知られるとともに、堀河本と承保三年本とが混態本でありそれぞれがどのような混態の実態を持つかを確認できることとなっていると思われる。

さらに、巻十四と巻十七とで、承保三年本の混態の切れ目となる一〇五三番歌前後と、堀河本の混態の切れ目となる一二一五番歌の前後とで、「はべり」の数を算出してみると表2のようになる。巻十四では一〇五三番歌までは承保三年本と天福本とが近いことが分かり、一〇五四番歌以降の巻十四内では三本は互いに近しくないことが分かる。巻十七では一二一五番歌までは堀河本と承保三年本とが近く、一二一六番歌以降では堀河本と天福本とが近いことが見て取ることができる。とくに巻十四においては、「保天」対「堀」について巻内の総数二十例のうち十六例が一〇五三番歌以前にあり、一〇五四番歌以降では小計の各値は四例・五例・四例と分散している。巻十七においては、「堀保」対「天」について巻内の総数十例のうち

八例が一二一五番歌より以前に、「堀天」対「保」について巻内の総数十七例のうち十六例が一二一六番歌以降にある。これらの数値が三本間の距離を明示している。「はべり」を用いることで諸本間の距離を測ることは有効であると思われる。

二 巻十までの前半での諸本間の距離

巻一から巻十までの前半部分の諸本間の距離を測るために作成したのが表3である。巻十までの本文のみ現存する二荒山本・片仮名本との二本と、二十巻が揃っている写本の堀河本・雲州本・伝坊門局本・天福本の四本を用いた（承保三年本はこのあたり定家本である無年号B類本の本文に近い本文を持つことが明らかなので対象から省いた。対象となる写本を増やすほどに数値の解釈が困難になる故もある）。また、表3は表1の「小計」にあたる列のみを示している（又列以降は数値がある列のみ掲出している）。

巻十までの「はべり」は巻八までの詞書が短い四季部を持つため用例数に乏しいが、それでも出てきた数値はそれなりに有意であると思われる。目に付くのは卜列であり、杉谷寿郎により同じ汎清輔本系統に分類されている二本の近さである。以下、この表から窺えることを列挙する。

○卜列より、二荒山本と片仮名本とは他の四本に比して非常に近い本文を持つ。

○オ列より、二荒山本は他の五本に比して独自本文を持つ。

表3

	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ
	堀雲坊二片天														
卷一	9	4	2	2			1	1	1						
卷二	1		2	1	2	2						1			2
卷三	6		2	5	5	3	1	3							
卷四	11	1	2		6	4		2	2	1					
卷五	3	2		1	2		1					1			
卷六	5	1	2		1										
卷七	8	2	1	2				2	1						
卷八	1		1				1								
卷九	8	2	2		1	1		5					1		
卷十	8	8	2	2	2	2	2	5		1			1		
計	60	20	16	13	19	12	6	18	4	2	0	3	1	0	2

	タ	チ	ツ	テ	ト	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ	マ	ミ
	堀雲坊二片天																
卷一	4				5						1						
卷二	1		1					2									
卷三	1		1	2	2	1	2		3		1	1					
卷四			2	3	2			1	4	2	1	1	1				
卷五								1		1				1			
卷六					1			2		1					1		
卷七	1				2			3									
卷八					2			1									
卷九				2	10												
卷十	1	1		5	7					1					1	2	
計	8	1	4	12	31	1	2	10	7	5	2	2	1	1	1	2	2

○カ列より、片仮名本は他の五本に比して独自本文を持つ。
○ト列・オ列・カ列より、二荒山本と片仮名本とは他の四本

に比して非常に近しい本文を持つと言えるが、それぞれ独自本文を持ち、その関係は単純ではない。

- ク列より、堀河本と雲州本とは他の四本に比して近しい本文を持つ。
- イ列より、堀河本は他の五本に比して独自本文を持つ。
- ウ列より、雲州本は他の五本に比して独自本文を持つ。
- ク列・イ列・ウ列より、堀河本と雲州本とは他の四本に比して近しい本文を持つとは言えるが、それぞれ独自本文をも持ち、その関係は単純ではない。
- テ列より、伝坊門局本と天福本とは他の四本に比して近しい本文を持つ。
- エ列より、伝坊門局本は他の五本に比して独

自本文を持つ。

○キ列より、天福本は他の五本に比してあまり独自本文を持つと言えない。他の五本とそれぞれ少し近づつ近しいところを持つ本文と言える。

○テ列・エ列・キ列より、伝坊門局本と天福本とは他の四本に比して近しいところを持つ本文と言えるが、伝坊門局本が他の五本に比して独自本文を持つところをも見ると、伝坊門局本と天福本との関係は単純なものではない。

○又列より、伝坊門局本と二荒山本と片仮名本とは他の三本に比して少し近い本文を持つと言える。

○エ列より、伝坊門局本は他の五本に対して独自本文を持つ。

○オ列より、二荒山本は他の五本に対して独自本文を持つ。

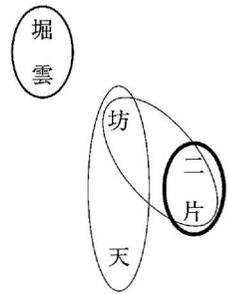
○カ列より、片仮名本は他の五本に対して独自本文を持つ。

○又列・エ列・オ列・カ列より、伝坊門局本・二荒山本・片仮名本は少し近い本文と言えるが、三本それぞれが独自本文を持ち、三本の間は単純なものではない。

○テ列より、伝坊門局本と天福本とは他の四本に比して少し近い本文を持つと言える。

○又列・テ列より、伝坊門局本は二荒山本・片仮名本と近い本文を持つところもあり、定家本である天福本と近い本文を持つところもあり、奇妙な位置にある非定家本の本文と言える。

以上を総合すると、



といった図を作成できるであろうか。

三 卷十一以降の後半での諸本の距離

卷十一から卷二十までの後半部分での諸本間の距離を測るために作成したのが表4である。卷十までの本文のみ現存する二荒山本・片仮名本は使えないので、二十卷揃いの写本として堀河本・雲州本・承保三年本・伝坊門局本・天福本の五本を用いた。

卷十一から卷十四まで・卷十五と卷十六・卷十七から卷二十まで、この三区分により数値に差異が生じていると思われる。g列・h列・i列・j列・n列・o列に顕著である。堀河本と承保三年本とが混雑本であることよって生じている現象であると思われる。そこで作成したのが表5である。あらかじめ卷十四の一〇五三番歌前後と卷十七の一二一五番歌前後とで区切った三区分にしている。

以下、表5から窺えることを列挙する。

表4

	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l	m	n	o	p
	堀雲保坊天															
卷十一	13	13	10		4	5	10		1	1				1	5	3
卷十二	16	6	12		8		1		3	1		4		2	6	
卷十三	12	7	10		4	1	3		3	1		3	3		8	
卷十四	12	9	8	3	2	4	1		7	2		6		1	3	1
卷十五	12	2	9		4	7		4			1	1	2			1
卷十六	25		6		4	11	1	5			4	8				4
卷十七	21	1	13	8	3	3	2	1		5	2	4	1	2	1	5
卷十八	14		4	5	3	1			1	1	2	2		2		
卷十九	9		7	8	3	1		1		5	1	3		2	1	
卷二十	11	1	9	5	4	1				9	4	6		1		
計	145	39	88	29	39	34	18	11	14	25	9	33	14	11	24	14

表5

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
	堀雲保坊天															
卷十一 ～ 卷十四1053	51	34	38		18	7	15		12	4		12	3	4	21	3
卷十四1054 ～ 卷十七1215	43	3	19	4	9	24	3	10	2	1	1	6	11		1	9
卷十七1216 ～ 卷二十	51	2	31	25	12	3		1		20	8	15		7	2	2
計	145	39	88	29	39	34	18	11	14	25	9	33	14	11	24	14

◎ 卷十一から卷十四の一〇五三番歌まで
(表5、一行目)

○ G列より、堀河本と雲州本とは他の三本に比して近い本文を持つ。

○ C列より、雲州本は他の四本に比して独自本文を持つ。

○ B列より、堀河本は他の四本に比して独自本文を持つ。

○ G列・C列・B列より、堀河本と雲州本は他の三本に比して近い本文を持つとは言えるが、それぞれ独自本文を持ち、その関係は単純ではない。

○ O列より、承保三年本と天福本とは他の三本に比して近い本文を持つ。

○ D列より、承保三年本は他の四本に比して独自本文を全く持たない。

○ F列より、天福本は他の四本に比して独自本文をあまり持たない。

○ O列・D列・F列より、承保三年本と天福本とが他の三本に比してごく近い関係を持つとだけ言え、承保三年本・天福本はそれぞれ独

自本文を持たない。

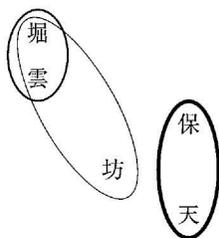
○ I列より、堀河本と伝坊門局本とは他の三本に比して近い本文を持つ。

○ L列より、雲州本と伝坊門局本とは他の三本に比して近い本文を持つ。

○ E列より、伝坊門局本は他の四本に比して独自本文を持つ。

○ I列・L列・E列より、伝坊門局本は堀河本・雲州本と近い本文を持つと言えるが、独自本文をも持っており、堀河本・雲州本との関係は単純ではない。

○ 以上によれば、この区分においては、「保・天」対「堀・雲・坊」という大きな構図が見られるが、保_天天であるのに対して堀・雲・坊の間には同一系統とまで言える近しきがあるとは言えないことになる。



◎ 卷一四の一〇五四番歌から卷一七の一二二五番歌まで

(表5、二行目)

○ M列より、雲州本と天福本とは他の三本に比して近い本文を持つ。

○ F列より、天福本は他の四本に比して独自本文を持つ。

○ C列より、雲州本は他の四本に比して独自本文を持つ。

○ M列・F列・C列より、雲州本と天福本とは他の三本に比して近い本文を持つと言えるが、それぞれ独自本文を持ち、その関係は単純ではない。

○ H列より、堀河本と承保三年本とは他の三本に比して近い本文を持つ。

○ B列より、堀河本は他の四本に比して独自本文をあまり持たない。

○ D列より、承保三年本は他の四本に比して独自本文をあまり持たない。

○ H列・B列・D列より、堀河本と承保三年本とは他の三本に比して近い関係を持つとだけ言え、堀河本・承保三年本はそれぞれ独自本文をあまり持たない。

○ P列より、伝坊門局本と天福本とは他の三本に比して少し近い本文を持つ。

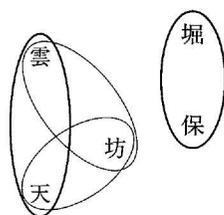
○ E列より、伝坊門局本は他の四本に比して独自本文を僅かに持つ。

○ F列より、天福本は他の四本に比して独自本文を持つ。

○ P列・E列・F列より、伝坊門局本と天福本とは他の三本に比して近い本文を持つと言えるが、それぞれ独自本文を持ち、その関係は単純ではない。

○ 以上によれば、この区分においては「堀・保」対「雲・坊・天」という大きな構図が見られるが、堀_保保であるのに対して

して雲・坊・天の間には同一系統とまで言える近しきがあるとは言えないことになる。



◎卷十七の一二一六番歌から卷二十の最終歌まで

(表5、三行目)

- J列より、堀河本と天福本とは他の三本に比して近しい本文を持つ。
- B列より、堀河本は他の四本に比して独自本文をあまり持たない。
- F列より、天福本は他の四本に比して独自本文をあまり持たない。
- J列・B列・F列より、堀河本と天福本とは他の三本に比して近しい本文を持つとだけ言え、堀河本・天福本はそれぞれ独自本文をあまり持たない。
- L列より、雲州本と伝坊門局本とは他の三本に比して近しい本文を持つ。
- C列より、雲州本は他の四本に比して独自本文を持つ。

○E列より、伝坊門局本は他の四本に比して独自本文を少し持つ。

○L列・C列・E列より、雲州本と伝坊門局本とは他の三本に比して近しい本文を持つとは言えるが、それぞれ独自本文を持ち、その関係は単純ではない。

○K列より、雲州本と承保三年本とは他の三本に比して僅かに近しい関係を持つ。

○C列より、雲州本は他の四本に比して独自本文を持つ。

○D列より、承保三年本は他の四本に比して独自本文を持つ。

○K列・C列・D列より、雲州本と承保三年本とは他の三本に比して僅かに近しい関係を持つとは言えるが、それぞれ独自本文を持ち、その関係は単純ではない。

○N列より、承保三年本と伝坊門局本とは他の三本に比して僅かに近しい関係を持つ。

○E列・D列・N列より、承保三年本と伝坊門局本とは他の三本に比して僅かに近しい関係を持つとは言えるが、それぞれ独自本文を持ち、その関係は単純ではない。

○以上によれば、この区分においては「堀・天」対「雲・保・坊」という大きな構図が見られるが、堀・天であるのに対して雲・保・坊の間には同一系統とまで言える近しきがあるとは言えないことになる。

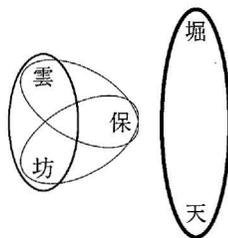
表6

	二	片	堀	雲	保	坊	天
卷一	15	15	23	21	19	20	18
卷二	8	5	9	11	8	6	10
卷三	13 (22)	27	18	21	19	22	20
卷四	27	23	26	30	23	22	27
卷五	8	7	7	8	6	7	10
卷六	7	8	9	11	11	9	10
卷七	13	13	17	20	12	10	17
卷八	2	2	3	4	3	2	4
卷九	23	21	19	16	15	17	18
卷十	29	26	24	28	28	28	29
計	145 (154)	147	155	170	144	143	163
			堀	雲	保	坊	天
卷十一			31	34	40	41	38
卷十二			34	28	35	36	36
卷十三			25	40	27	29	32
卷十四			30	40	36	30	33
小計			120	142	138	136	139
卷十五			26	25	27	22	32
卷十六			43	45	45	41	52
小計			69	70	72	63	84
卷十七			44	45	47	45	48
卷十八			22	22	27	18	23
卷十九			24	23	23	20	21
卷二十			34	23	30	23	34
小計			124	113	127	106	126
計			313	325	337	305	349

表7

	堀	雲	保	坊	天
卷一 ～ 卷十四	275	312	282	279	302
卷十五 ～ 卷二十	193	183	199	169	210
総計	468	495	481	448	512

以上のように、「はべり」を用いることによってその本文の距離を或る程度は計測できるように見える。ただ巻十一以降の



次にそれぞれの巻での使用数を示し、巻一から巻十までの前半・巻十一から巻二十までの後半、それぞれについて言及していきたい。まず、数値として表6を掲げる。前半部分では七本

四 総数から見えてくるもの

後半部分の分析から知られるように、諸本の本文の相対的な距離を測ることになっており、一本の性質が変わるだけでその相関性の全体像は大きく異なる様相を描くことになり、計測した結果を判断することが大層難しくなる。

に関して、後半部分では五本に關しての数值であり、後半部分はこれまで同様に堀河本と承保三年本の混態を考慮して卷十一から卷十四まで・卷十五と卷十六・卷十七と卷二十までの小計を示してある。(本論では、歌の出入りについては考慮しないで考察を行ってきたが、実は二荒山本は卷三の一六番歌から一三五番歌までの二十首を欠く。表6では片仮名本の該箇所をの数を加算したものも示しておく。括弧内が加算後の数值である)。

前半部分の数值を見ると、二荒山本・片仮名本・堀河本・承保三年本・伝坊門局本の五本は数值にあまり差がないことが分かる。比して本文に手が加えられよく整えられていると見える定家本であるところの天福本の数值が僅かに多い。天皇への奏上を意識している本文としては「はべり」は多用されているのが穩当であると考えた所為によるのであろうか。定家本である無年号B類本に近い本文を持つと言われる承保三年本の数值と比較しても天福本の数值は高い。卷八までの歌々はあまり長い詞書を持たないので「はべり」の使用数はあまり多くなく顯著ではないが、表7の二十卷すべての総数を比すと天福本における「はべり」の総数は他本より相当多い結果となる。

これに比して奇妙なのは雲州本における使用数である。前半として卷十四までは他本に比してその使用数は多い。天福本よりも大きい数值を示している。古本系統とは言いながら雲州本も丁寧物言いであるのが適當と考えて「はべり」を多く使用している本文であると見える。しかし、その傾向は卷

十五以降では変化し、他本に比して多い数值を示さなくなる。雲州本は卷十六以降において「よみ人知らず」が脱落している箇所が多い。卷十五あるいは卷十六以降の雲州本の性格を一考する必要を感じさせる。

また、総じて「はべり」の使用数が少ないのが堀河本と承保三年本と伝坊門局本である。堀河本が堀河本本来の本文を持っていると考えられる卷十四までの総数を表7で見比べると、三本の数值があまり変わらないことが分かる。ただ数值が近いだけで使用箇所等には大きな懸隔があることには留意が必要である。

まとめとして

「はべり」の諸本間の数值を見ることで、本文間の距離の測定ができることを確認したうえで、代表的な七本の距離を測定してみた。使用数が多い卷九以降においては有効と見える。和歌のなかの語句の使用についてはその審美的な側面の問題もあり、単純に本文の性質に言及しにくい。詞書や詠み人から考察を加えることのほうが後撰和歌集の本文について考えていくのには有意であると考えている。中でも「はべり」は詞書内の文意の改変といったことには関わず、もっぱら話し方の態度に関わるものであるので、本文間の距離を測るのにはそれなりに使用できると思われる。今回の調査は単純に数値だけのものであって、その使用の具体に言及することをしなかった。丁寧語

として多く使用されている「まうでく」も諸本間で使用に差異があり、あるいは「まかる」といった語の使用もあり、こうした語の使用の仕方に疑義が生じる場合もある。「まうでく」「まかる」といった語の使用とともに「はべり」の具体的な使用の実際から見えてくることに言及する機会をいずれ設けたい。

(1) 杉谷寿郎『後撰和歌集前後』青簡社2016の整理による。杉谷は『後撰和歌集諸本の研究』笠間書院97の系統整理をもとに、その刊行後に出現した伝坊門局本を含めた系統の再整理を提示している。

(2) 後撰和歌集における「はべり」については、その多用に基づきながら後撰和歌集詞書の性質に言及した重見一行「後撰和歌集詞書における「侍り」多用に関する試論」「国語と国文学」56巻10号1979.10、後撰和歌集における「はべり」の聞き手尊敬語としての性格を明らかにして詞書が歌の成立事情を客観的に述べようとする姿勢を持つことに言及した田所寛行「後撰和歌集」詞書と聞き手尊敬語「侍り」茨城キリスト教大学紀要30巻1998.12、がある。しかし、本論から知られるように後撰和歌集における「はべり」の使用は諸写本間で大きく懸隔があり、その扱いは容易でない。

(3) 片桐洋一「後撰集」の本性」「国語国文」第二五巻 第五号1966.5・『後撰集』の物語性」第四四巻 第一〇号1967.10、いずれも「古今和歌集以後」笠間書院5000に所収。

(4) 本論は、柳田健一「後撰和歌集」の親疎関係一巻一〜巻十を対象とした諸本分類を中心として―(前)(後)―「国語国文研究」131号2007.3・132号2007.5で言及されている方法論に着想を得てはい

るが、「はべり」一語に限るなど、より単純化したものとしている。(5) 杉谷寿郎『後撰和歌集諸本の研究』第二章第一節に指摘があり、福田孝「堀河本『後撰和歌集』について」「武蔵野大学日本文学研究所紀要」第二号2013で検証を加え、杉谷の指摘を再確認した。(6) 福田孝「承保三年奥書本『後撰和歌集』について」「和歌文学研究」101号2012。

(7) 本論にも見られるように測定が難しいのがその本文の位置づけに困難がある伝坊門局本である。立石大樹「伝坊門局筆後撰和歌集少考―四季部を中心に―」「国文学」95号2012、立石大樹「伝坊門局筆後撰和歌集続考」「国文学」96号2012.3に言及がある。

諸本としては以下を使用した(括弧内が使用略号。歌番号は新編国歌大観番号を使用した)。

二荒山本(二)：小松茂美『日本名跡叢刊二荒山本後撰和歌集上下』二玄社

片仮名本(片)：山田孝雄『後撰和歌集』古典保存会

堀河本(堀)：国文研電子資料館マイクロ/デジタル日録DB「100061314 八代集」

雲州本(雲)：久曾神昇・深谷礼子『後撰和歌集(雲州本)と研究』未刊国文資料刊行会

承保三年本(保)：『天理図書館善本叢書69 後撰和歌集別本 詞花和歌集』

伝坊門局本(坊)：片桐洋一『後撰和歌集 伝坊門局本』和泉書院
天福本(天)：『新編国歌大観 勅撰和歌集』角川書店